

へき地複式学級（中学年）社会科授業の工夫

—生活を軸とし、教科を有効関連的に設定した多様な学習活動実践事例—

黒柳 諭 山口 敏恵

Devices of Social Studies at Remote Places (9-10 ages)

Examples of Various Acts for Study Focusing on Subjects Based on Lives

Satoshi Kuroyanagi / Toshie Yamaguchi

キーワード： 社会科 Social Studies, 生活科 Living Environment Studies, 総合的な学習の時間 Integrated Studies, 国語科 Japanese Language Studies, 特別活動 Special Activities

I はじめに

山間へき地教育に携わることになった初年度、母校勤務の新卒事務職員と同時に奉職した。「大学を卒業するまでの学校生活は、小さくなって生きて来た。それぞれの集団の中で自主的に生きることができなかった。」と一人語りが聞こえた。以来、山間へき地少人数複式小学校の子どもたちの生きる力の醸成に向け、授業中心とした教育活動の実践研究を進めてきた。

改訂された文部科学省の指導要領には、次の教育目標を定め、学習指導を行うことを記載している。

学校教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる力を培い、国家及び社会の形成者として必要な基本的資質を養うことを目的として行われるものとする。¹⁾ 教育活動を進めるにあたっては、児童の生きる力を育むこと、課題解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育む、主体的に学習に取り組む態度を養う教育に努めなければならない。²⁾ 授業は、創意工夫を生かし、体験的な学習、問題解決的な学習の重視、自主的自発的学習を工夫する。³⁾

山間へき地複式少人数学級では、指導要領に準拠し、共に学びあい、自ら学び自らか考えるなどの生きる力の育成を図ってきた。

教育活動は、子どもが生活する地域の環境や構成する集団の規模の影響が大きくかわる。

学校教育は、教科基準があり、その基準に合わせて進めていく。指導要領は、標準的な学級規模を通して行うことを基準としており、山間へき地複式学級の小学校とは差異がある。そんな中で、指導要領の基準に沿った子どもを育成するためには、教科を中心に教える学校教育の方法では、無理を生ずる。そのため、「教えるための教材を教科書だけに求めるのではなく、子どもが暮らす地域社会の中に求める指導の改善を図った。子どもの生活現実から生まれた願いを素材とし、教師ばかりではなく、地域の人や自然などの環境全てから学ぶ教育活動を展開してきた。

子どもは、日々活動している。活動を通して成長している。その土壌は子どもが生活する地域である。地域の自然を見つめ、身近な人間と深くかわりながら成長していく。精一杯生きようとする子どもは、生活の中の「ごくありふれたことにも」心をひびかせる。心の響きは、

体のひびきとなり、表現や活動が生まれる。

子どもは表現や活動を通して、自己の生活を問い直し自己を高めていく。このような、自己表現活動の筋道に働く子どもの認識や感性の問い直しの過程は、その子の生き方そのものである。

生活の中にある「こと」に対する「心」のひびきに、教科内容を見通し、その響き合いから生まれる表現活動を行い、人間形成していく過程を大切にしていってより確かなものにしてきた。

生活の中のごくありふれたことの願いは、子どもにより、経験や発達により問題解決にいたる追求過程が違う。従って、生活に教科を重ね、子どもの願いに迫る授業は、毎年違いが生ずる。

本実践研究大雨河小学校の4年生2人学級の子どもが、生活経験から生まれた切実な問題を社会科中心とした教科等を有効関連させ、生きる力を育くむ実践研究を重ねた。単元「ぼくとわたしのケーキ作り」と名付けとりくんだ。その成果と見えてきたか課題を考察することを通して実践研究とする。

2 研究の方法

- 1) 子どもが願い、求めているものを教材化し、有効関連学習を通して単元を構想する

子どもが自ら求めるものであれば、取り組みも真剣になり、追求も意欲的になる。

 - ・ 目の前の子どもが何を考え、何を求めているのかに目を向け、教材化する。
 - ・ 追求の筋道にそって、子どもの興味、関心、願い等必要に応じた様々な学習を、教科の枠にとらわれずに繋げていき、有効関連学習として単元を構想する。
- 2) 五官を使った体験的活動を単元構想の中に位置づける

単元構想の中に、子どもの願いや求めるものを達成させるに必要な体験的活動を位置づける。子どもは、自らの願いに応じた活動であり、活動そのものが追求しようとする切実な問題であり、真剣になって取り組むことになる。その過程で様々な知恵や技能を生きた知識として身につけていくことができる。
- 3) いろいろな人から学ぶ場を想定し、人との

関わりを大切にしたい授業を創る

2人学級のため、単元を通してより多くの人と関わりながら学びの場を設定する。学習のステージ（舞台）は学校、家庭、地域全体を教育の場と考え、地域の教育力を活かす。少人数で動きやすさを最大限に生かす。電話を使うことや、現地へ出かける、学校に来ていただき活動を通していろいろな人たちとふれあいながら学ぶ。

4) 時間と環境を保障する

子ども自ら解決していく学習過程を位置づける。そのために、その子なりに追求が可能となる時間と環境を保障し、解決の方法が持てるようにする。

3 研究実践・考察

- 1) 子どもの生活現実の中で、求めている願いを探る（有効関連学習の基になるもの）

前年度、男子1名（啓介）、女子1名（万里）の3年生を担任となり、「おいしいきなこだんごを作ろう」の実践をした。

子どもの生活の中にある願いを追求し、教科を有効的に関連（有効関連学習）させ、問題解決学習にあたった。子どもの生活から生まれた願いを起点に単元を構想し、大豆の栽培、挽き臼でのきな粉作り、挽き臼と関連させながらの昔調べ、1年生と交流によるおだんご作り等を軸に学習を展開した。

子どもは、自分たちがやりたい願いをもち続け、意欲的に追求する姿を見せた。子どもは、本当にやりたいことを追求していくことが、学習であることを教えてくれた。

本来学ぶということは、これを学習したいんだという、その子なりのこだわりとか願いを達成するために追求していくことなのではないか。子どもが願い、求めているものを追求する過程で、驚きや発見や喜びがあり、学ぶ喜びにつながっていくという思いを強くした。

4月、持ち上がりで4年生の担任となった。昨年の実践を通して、追求する楽しさを味わってきた啓介と万里である。

本年度は、2人で何を追求していこうか、2人が心からやってみたい、学習したいと思っいることは何なのだろうかかと悩んでいた。ごみ

への関心は、川はどうだろうかとか2人を見ながら考えたが、解決できなかった。そこで、直接2人と教師がともに単元となる教材探しをした。これまでの経験の振り返り「4年生で勉強したいことややってみたいことは何か。」と問いかけた。

下記は、授業実践を終えた後、その日の教師メモである。

（略）すると、「今年も、きな粉だんごを作って1年生の子に食べさせてあげたい。今度は、きな粉も米の粉も、自分たちで挽き臼で挽いて、作りたい。」と万里。「ほかの物がいいなあ。」と啓介。2人にその意味を問い返したが、具体的なものは浮かばない。啓介は、「チョコ!」「みんな好きだから。」とつぶやくように言っていたが、活動に向かう心の動きはなかった。

2人は、去年、取り組んできたこととして、新しい1年生の子たちに何か作ってあげたいという思いがあること（この時間の中ではっきりと意識化されたものであろう）、2人がこの時間の中でそういう思いを強くしていったことが、予測され、取り組む方向が少し見えてきた。

来年度も新しい1年生が入る。自分たちは、1年生が学校生活に適應できるように支援したいとの願いが見える。学校生活の中で、自分たちが役に立ちたいという萌が生まれたからであろう。この願いは、追求に大きな影響を与えるに違いない。（4/16 教師メモ）

3人で話し合う時間の設定をした。教師も生活する子どもの一員として教材を探す。教師が、大雨河らしいもの、額田らしいものがないか方向付けをした。追求は続かなかったため教師は、社会科学習副読本「ぬかた」を提示した。

2人は地元の工場でケーキを作っていることに着目し、ケーキ、しかも、材料も手作りのケーキを作ってあげたいという思いをふくらませていった。

その後ケーキが意味づけをした。

きよ年、きなこだんごをよく作りました。さいしょおもったことは、1年生の子にはあげてないから、1年生の子にあげたいと思いました。「ぬかた」にケーキのことがのっていました。

こんどはケーキを作ってあげたい。手作りのおいしいケーキを作りたいと思いました。手作りだとおいしいし、心がこもってその人の気持ち伝わるからです。（万里）

ケーキならみんなすきだと思ふ。ぼくたちもすきだから、ケーキを作ってあげたい。買ったチョコは、だれでもあげることが出来るから、ぼくたちしか作れないケーキがいい。ケーキをあげて、学年ごとに集中してやっている勉強があるから教えてあげたいし、1年生の子となかよくしたい。（啓介）

ふとしたきっかけで出たケーキであったが、手作りケーキの価値を子どもなりに意味付けている。2人が追求していくものとして、値打ちのあるものであることを、子どもなりにとらえている。

2) 子どもの願いや求めるものを教材化（教科の枠にとらわれない単元構想）

2人が本当に願うことに取り組ませたいとは思いながらも、子どもが追求していく対象として手作りケーキは本当に値打ちのあるものなのかという迷いがあった。2人はケーキへの思いを膨らませ、やってみたく願っている。それならば、教材化したい。そして、次の単元構想を立てた。

3) 社会科を中心とした教科を有効関連付ける

2人は、ケーキの材料である小麦粉、いちご砂糖も何とか自分たちで作ってみたいと考えている。小麦粉や、いちご、砂糖の原料となる砂糖きびなど育てた経験はない。

すべてが初めての体験ではあるが、「1年生の子に、ケーキもその材料もすべて自分たちで作った手作りのものをあげたい。」という願いが追求のエネルギーとなり、それぞれの栽培の方法や作り方を探っていくものと思われる。

中学年の社会科の扱う領域は地域社会となっている。①人々の生活と自然条件を基本に、生産活動と消費の特色、②地域社会の生活が協力的計画的に行われることに着目し、地域社会の成員の一員としての自覚から社会の発展を願うとある。

平成11年度①と②を2年間で学習できるように指導要領は改訂が行われた。麦から小麦粉にするまでの、麦刈り、はざかけ、脱穀、製粉という一連の作業活動の体験は、活動を通して社会科の農業と人の生き方の学習が可能となる。おいしいケーキの作り方にも関心が向き工場生産と生産者と追求するに違いない。ケーキを作るために、良い商品の販売についての調査も可能となる。砂糖きびから黒砂糖をつくる活動。この活動を通して他地域のかかわりや特色あるくらしの追求も可能となる。

昨年お世話になった啓介のひいおばあさんを初めとして、小麦農家のYさんいちご農家のKさん、さとうきびの苗を分けていただく沖縄の入嵩西さんとの出会いとふれ合いも期待できそうである。2人学級という特性を生かし、いろいろな人とのかかわりを大切にした授業展開が可能である。

社会科は、新しい民主的な社会を主体的に創造する人の育成にある。教育とは、子ども一人一人を社会創造の主体として育てることにある。教科の本質と子どもと子どもの関係を追求していく中、教科が何かの問題になってくる。³⁾ この活動を通して、教科学習が可能である。

新1年生がケーキを食べる時期には、一連の追求する学習を通して、やり遂げた喜びを味わい、新たな活動に立ち向かおうとする力を身につけていくことを願う。学校生活の中で、新たな仲間思いを寄せ、共生する心を芽生えさせる期待や、いろいろな人たちとかわる中で、温かいふれ合いを感じることや、その人たちの生き方を学ぶことを通して、多くの人たちとともに生きる喜びを感じていくことも期待できる。

学習環境を大雨河地区に限定せず、地域の人やことと関わる。電話や手紙を使って沖縄と連絡をとるなどの活動を考えていく。「ケーキの作り方の学習」「愛知県の地理や農業」「沖縄の気候や生活(社会)」「お礼の手紙を書く(国語)など、「手作りのケーキ作り」を軸にし、教科を有効関わづけた学習の展開が可能である。ケーキも学習も、いろいろな人との出会いやふれ合いから人の生き方にも触れることができる。

後半に、単元構想図「ふくらまそうぼくとわ

たしのケーキづくり」の構想を掲載した。

掲載した単元構想図は、予想される構想である。具体的な構想は、子どもとともに作りだしていくため、常に子どもの事実に戻って修正する。複式学級は、2学年集団である。教科指導も2学年で行う教育活動の工夫を行っている。幸いにも昨年は②を行い、今年度は、①の領域の学習が可能となる。

単元は、長期間にわたる活動となるが、社会科を中心に教科・領域を関連付けていくと、自分が直接かかわるという体験と、それにかかわる人生き方に触れることができる。社会科では、地域で学習する教材を調査、考える、表現するなどの活動を通して問題解決する授業形態が一般的であったが、2人学級では多様な活動は生まれにくいいため深まりが少ない。生活の中の願いである自分が作る活動と重ねることを通して、より深い学びが期待できる。

3)単元の目標

- ① 小麦粉、いちご、砂糖、ケーキなどを作る体験活動を通して、粘り強く追求し、自分たちの力で完成した成就感を味わう。
- ② 協力しながら追求する楽しさを味わう。
- ③ 学校以外の人も先生として、教えてもらう。触れ合いの中で、その活動に携わっている人の生き方を学ぶ。
上記のようなねらいを持って、実践した。

4)砂糖きび、いつ来るかな(入嵩西さんとの出会いから)

実践最初の難問は、3つの材料の栽培ができるかの可能性である。小麦農岡崎のYさん、いちご栽培農家幸田のKさんが、活動に協力してくださった。2人とも大喜びであった。いちごや小麦から農家で働く人への学習が可能となった。

砂糖づくりも実現への可能性が出てきた。日本農業新聞に、砂糖きびのポット苗の植え付けが始まったというニュースが掲載された。電話を使い、石垣島農業開発組合に電話。早速国語の時間を使って砂糖きびを20本売ってほしいという手紙を書いた。

手紙は、石垣島製糖株式会社の入嵩西正治さ

んへ配達された。「ポット苗を百本、ただでお願いします。」

親切な電話での話ぶりに教師も感動し、この感動を啓介、万里とともに分かち合わなくてはと思い、翌日の朝の会でその話をする。

その日、啓介が下記のように書いている。

「百本!!」…（略）…とびはねそうでした。百本どこに植えられるかなあと思いました。しかも、ただって言ったから、いつおくってくれるかなあ、うまく作れるかなあと、ドキドキしています。百本ってどれくらいかなあ、ポット苗ってどうなっているのかなあ、どうやってさとうを作るのかなあと、楽しみでした。いつくるのかなあと思ってるのも、楽しみです。(5/29 啓介の作文)

砂糖を作りたいという願いに一步近づいたという嬉しさ、石垣島の入嵩西さんという全く知らない人が、自分たちを応援してくれようとしていることを知った喜び、遠い石垣島からいつ届くのだろうというわくわくする気持ち、そんな啓介の思いを読み取ることができる。入嵩西さんとの出会いの中で、人の心の温かさにふれ、喜びをいくつももらうことができた。

5) ひいおばあちゃんに教えてもらおう（体験的活動の中で生まれる学ぶ喜び）

「手作りのケーキをつくりたい」という願いは、漠然としたものであった。それぞれの活動に入る前に、どうしたいのか、どんなものを作りたいのかをはっきりさせて取り組ませた。

啓介は、サラサラの小麦粉、万里は売っているような白い小麦にしたいと願い、唐箕をかけるという体験に入った。唐箕が使えず、麦の髭は殻が取り除けなかった。「これだときたない小麦粉になってしまう。(万里)」

「ひいおばあちゃんに教えてもらいたい。(啓介)」という2人の願いから、啓介のひいおばあちゃんから学ぶ授業を設定した。

本時、2人は、耳の遠いひいおばあちゃんによく聞こえるようにと、膝を曲げて耳元でゆっくり話す姿を見せた。ごみを取り除く方法としてひだし（箕の中に小麦を入れ、風車を動かす

ことで箕の中に風を送り、その風でゴミを取り出すこと）の方法を教えてもらう。

万里は「難しかったし、疲れた。」と言いながらも、ひいおばあちゃんから「それでも、あなた、上手にやれたよ。」と言われたことと、もう一度ひいおばあちゃんの実演を見ることで、実が箕の前の方にたまる法則を発見していく。そのことが、「先生、やってみたい。また…」につながっていったものと思われる。

さらに教師に「うまい、うまい。うまいじゃん。万里ちゃん。」、啓介に「実がかなりぎりぎりのところまで来ている。」と認められたことが自信や喜びとなって、「啓ちゃん、形整えてからやったほうがいいな。」「わたしの場合こうなっていたから。」と、自分が学びとったことを啓介に親身になって教える万里の姿へとつながっていったのではないか。

万里の追求は、「形を整えずにやってみたい」という、一步進んだ追求へと拡がっていく。上手にできみんなからほめられ満面笑顔の万里であった。ひだしの方法を発見した万里が、啓介とかかわりながら学ぶ喜びを感じた場面である。

他にもっと役立つ昔の道具はないか道具探しをした。探しを通して社会科「暮らしに役立つ、昔の道具と暮らしの様子」の教材が出来上がり、追求が行われた。ここでも、自分たちが作るという活動と重ねていった。

6) 育てた砂糖きびをしぼろう（個性的な追求から生まれる学ぶ喜び）

秋に入嵩西さんが来て砂糖を作ってください。2学期は、沖縄のことを調べる学習から始まっていった。調べたことをB紙にまとめ、入嵩西さんに聞いてため一人調べを進めた。

社会科「特色ある地域の人々の生活」「ひとびとの生活や産業、国内の他地域のかかわり」の教材が生まれ、砂糖きびを送ってくれた人との触れ合いができるという喜びと重なり、社会科の教材だけとは違う追求を見せた。

入嵩西さんの来校が決定した。それまでに自分たちが育てたさとうきびをなんとか搾り、大雨河産砂糖を作りたいと動きだした。沖縄での搾り方を資料で学習した。砂糖きび搾り機はな

いため、絞り方を問題試行錯誤した。育てていた砂糖きびを使いしぼる方法をひとり調べた。

啓介は、木で押しつぶして汁を出そうと考えたが、ペンチでは手で汁を出す方法で行った。たくさんしぼることができず困っていた。

万里の方は木でたたく方法を考えた。木の代わりに金槌でたたいて汁をだす方法を考えた。汁と砂糖きびの繊維の部分も取れて混ざってしまうので困っていた。りんごをすりおろしてジュースの体験があると言い、砂糖きびを持って帰る。翌日、それをお茶パックにいれてきた。よくしぼれたことを嬉しそうに報告した。

お互いに工夫したしぼり方を紹介し合うかわりの時間を設定した。啓介「ぼくのはとても力があるから、疲れてしまう。力を入れずに楽な方法で汁をしぼりたい。」万里「短い時間でたくさん汁をしぼりたい。」それをうけて、搾り方のいい方法をみつける授業である。

授業は、2人ともやってみて比較した。砂糖きびをすりおろしながら、「あつ飛んできた、水っぽいものが。(啓介)「(すりおろしているときとうきびの繊維部分がけばけばになる。その部分を指して)たわしみみたいだよ。」「このけばけばが固いもとだね。(万里)」等発見しながらの活動にもなっていた。

以下がその授業の後半部分の記録である。

砂糖をしぼろう 11/14 授業記録 4/6 時

82T : それぞれの方法について、やってみたことや気がついたことを言ってみよう。

83 万里 : 力があるけど少しとれた。①

84 啓介 : 場所を変えずにやっているとそんなに力がいらなかった。②

86T : 万里ちゃんの方法は。

87 啓介 : 万里ちゃんの方法は力が少しいるけどすぐくずれて、いっぱい絞れる。

88T : 自分のやり方は、吸っている時に手が疲れて、汁もたくさん出た。

90T : 先生どっちがいい。④

91T : それだよ問題は。どっちがいい。

92 万里 : 私のやり方の方がいいと思う。たくさんすればするほど汁が出る。⑤

94 啓介 : 両方がいいと思う。

95T : どういうこと。

96 啓介 : ケバケバを切ると、そこが残るから。ペンチで絞れば出る。⑥

①③発言からは、2人がお互いの方法の良さを認め合っていることがわかる。啓介は本時でより良い方法をみつけたことが②発言から分かる。さらに、④⑤発言から、自分なりに考えた方法に満足し、自信をもっている万里の姿がある。

⑥⑦発言から、啓介は、万里の方法がたくさん搾れるという良さを認めつつ、自分の方法の良さ(すりおろすことができない部分をペンチで搾ることができる)にも気づいた。砂糖を作りたいという願いがはっきりしており、そのために一人調べをして搾りだす方法を考え出した。

かわりの授業を設定したことが、お互いの良さを認め合ったり、自分の考えの良さに気づく結果になっていった。

両方のやり方を使いさとうきびを搾っていた。大変な作業であったがたくさん搾りたいという願いが頑張らせ、300ml程の汁を搾ることができた。

終戦直後額田にも砂糖工場があったと聞き、昔の道具調べと当時の暮らしへと発展した。

7) 入嵩西さんと砂糖をつくろう (かわりのなかで生まれた学ぶ喜び)

教師は石垣島へ出かけ、大雨河で育てたさとうきびの糖度を調べていただく。糖度が少なく、砂糖になるか分からない程度であった。入嵩西さんが「石垣島のさとうきびの汁を送りましょう」。

一緒に砂糖を作るにあたり、教えてもらうのではなく、より主体的に取り組めるようにしたいと考えていた。

2人(と教師の3人)で一度砂糖を作って、その上で入嵩西さんと砂糖作りの指導を受けると、より切実で主体的な取り組みになるのではないか。そう考えて、送っていただく。送っていただいた30lの搾り汁には、『これで先生といっしょに一度作ってみてください。』と記載があった。啓介も万里も大喜び。

さとうきび汁 啓介

略)・・何かが届いた。ぼくは何が届いたか分からなかった。先生が「4年生に関係あるもの。」と言ったので何か聞いた。先生は、「後のお楽しみ」と言いました。ぼくはどうしてもみたくてうずうずしていました。先生が箱だけを見せてくれました。「サトウキビ汁」って書いてあった。教室で見たら、ペットボトルに茶色いのが入っていました。サトウキビの汁は茶色くないと思っていたので、本当かなあとおもいました。

入嵩西との授業を開始した。2人は、前回の砂糖作りの失敗の原因は何か、自分たちが搾った汁は少ないので送ってもらった石垣島の汁と混ぜて作りたいとの思いを持って授業に臨んだ。

本時は、それを入嵩西入さんに発表。入嵩西さんからやはり煮詰め方が足らなかつたことが原因であることを聞き、万里は「やっぱり。」とつぶやいていた。

もう一度煮詰めていけば砂糖になること、2人が搾った汁は糖度が足りないので石垣島の汁と混ぜる。搾ったものは固まるかどうか分からないがそれだけでやってみた。入嵩西さんに火からおろす瞬間を教えてもらい攪拌していき、黒砂糖ができたときは3人して大喜びをした。まさに感動の一瞬であった。

この砂糖作りの後書いた下記作文⁷から分かるよう、おおいの違いを発見した啓介であった。

砂糖づくり 啓介

「今から入嵩西さんと、砂糖作りを始めます。」

11月21日に入嵩西さんと黒砂糖を作りました。初めは、今までやってきたことを発表しました。入嵩西さんは、失敗した黒砂糖を見て、『もう一回、につめれば黒砂糖のかたまっただのができるよ。』と言われたので、あとでやることにしました。なべにうつしかえて、かきませたら、砂糖きびのしぼり汁がたまってきた、べつの箱にうつしかえたら黒砂糖ができました。

第1号ができあがったから、やったあとと思いました。先生のしっばいよりまずいから、全然だめだと思った。

ぼくたちで作ったしぼり汁は、「かたまらない部分が多いので、かたまらないかもしれない。」

と入嵩西さんが言ってくれました。

一度作ってみることにしました。アぼくたちの作った汁はトウモロコシのにおいがしました。石垣島のはやきいもだからおかしいなと思いました。時間がたつにつれてにおいが変わっていくのが分かりました。イ2号の方はぼくたちが作ったやつだからぼくが食べたら石垣島産よりおいしく感じました。3号目は石垣産で、万里ちゃんがあくをすくっていました。その時ぼくは2号目を作っていたから、万里ちゃんはあくとりとかたいへんそうだなあとと思いました。

最後のかきませるとき、ぼくが手伝いました。やつぱりかたまろうとしているからかたいなあと思いました。

黒砂糖が三つできたから、こつがつかめて何個でもできそうです。でも、さとうきびが少ないので何とかグラムできるか心配です。どうにかして、がんばりたいと思います。…入嵩西さんは、わざわざ愛知まできてくれたので、ぼくは今度石垣島にいつてみたいです。

(11月21日)

注) 教師は教材研究のため、石垣島へ出かけ、砂糖作りを体験した。煮詰めすぎて固くなってしまい、砂糖が黒飴のようになってしまった。その黒飴のような砂糖のことを言っている。

8)ぼくも入嵩西さんのような人になりたい(入嵩西さんの生き方に迫る啓介)

社会で、沖縄の砂糖きび栽培について学習をした。砂糖きび栽培の現状と問題点、砂糖きびの歴史等について、沖縄県庁から送っていただいた資料をもとに学んでいった。

さとうきびの栽培に力を尽くしてきた儀間真常や宮城鉄夫が農民の暮らしが楽になるように努力してきた人であることを知った。啓介は、ポット苗を開発し、機械化をはかって砂糖きび栽培を活性化しようとしている入嵩西さんを、儀間真常や宮城鉄夫とつなげて考えていった。

「入嵩西さんは農家の人が喜ぶように、ポット苗や何かを作って努力しているからすごいなあと思いました。ぼくも、入嵩西さんのような人になりたいです。」と、入嵩西さん宛の手紙

に書いている。

学習を通してまだ分からなかったことを、電話を使って入嵩西さんに聞くことにした。その日の日記に、啓介は次のように書いている。

今日、二時間目に入嵩西さんへ電話をしました。万里ちゃんが先に言って、その後ぼくが言いました。入嵩西さんは、どんどん質問していったのにすぐに答えてくれたから、すごいなあと思いました。なぜあんなに砂糖きびのことを知っているのかなあ。たぶん、新しい品種を作るためにうーんと勉強したと思うから、入嵩西さんは農家の人のために、ものすごくがんばってるんだなあと思いました。

(12月5日の日記)

5月には、入嵩西さんのことを「めちゃめちゃしんせつな人」ととらえていた啓介が、この単元を通して、入嵩西さんの砂糖きびに生涯をかけて生きる生き方に少しでも迫ることが出来たのではないかと。それは、入嵩西さんと実際に出会い、一緒に砂糖を作ったという体験と、本の上で学習したことがつながっていったからと思われる。

9) ケーキ作りは4年生の一番の目的(総合学習の広がり)

黒砂糖はできたが、まだ何本もの砂糖きびが残っている。2人は1年生だけでなく教えていただいとお世話になった人たちにもケーキを作ってあげようと考えていて、全部で14個のケーキを作ろうとしている。しかし、作った黒砂糖だけでは量が足りない。それらはどうするつもりなのか。今後の展開について相談する時間を設定した。それはつねに子どもの事実に戻るとことであり、願いを達成するためにまだ残されている問題について、2人はどうしたいのか、どうしようと思っているのかをはっきりさせる時間ととらえる。2時間扱いとして、十分時間をとって啓介と万里とで今後の追求方向を決定していった。その後、授業の中で2人は次の発言をした。

これからどうしていくか、追求の方向を相談する話し合い」12/8 授業記録。

啓介も万里も、1年生5人にあげるケーキには、いちご5こをのせようとしている。5個できるかは分からない。一日1個収穫すると数が揃うまで前のものが腐ってしまう。

72T: こういう方法もあるよ。足りない分は買うという方法は

73 啓介: 本当は1年生にあげたかったんだから。1年生にあげる分は全部自分でつくりたい。

79 万里: 自分たちの作ったのをあげたい。

85 啓介: 黒砂糖も小麦もだよ。

90 万里: 自分たちが、汗水たらし、心をこめて作った。いろんなところに聞きに言ったし、ためしにつくったり研究したから。

啓介の73発言や教師もとらえなかった啓介の思いであり、1年生にあげるすべて手作りとしている。このあと万里は、「4年生のはじめから決めた目的」どこまで続くか分からないけど、かなうまでやりたい。」という。

4月手作りケーキがあげたいという二人の願いは、多く人との関わりを通して、さらに強いものとなり、3学期間の長期の追求を可能にしたと思われる。

5 まとめと今後の課題

1) 啓介と万里の願いをそのまま教材とし、その願いを達成させるためのさまざまな学(体験的活動も含める)を有効関連的にからませる形で単元を展開してきた。この結果、2人の願いは確実にふくらみ、4月初よりも強いこだわりとなり、この子たちの生活の全てになっきている。

→ 4(1), (2), (9)

2) 様々な体験的活動に取り組んできた。それらは全て子どもたちの求めに応じたもので、どれも2人にとって切実な活動であった。活動の一つ一つが願いを達成させるための大事なステップであり、一步一步近づいているという思いが、学ぶ喜びとなり、追求のエネルギーとなっていく。

→ 4(5), (6), (7)

3) 2人が願ったことは、いろいろな人に教えてもらわなければならないことであった。このことが、地域の人（ひいおばあちゃんやYさん、Kさん）や石垣島の入嵩西さんとのふれ合いを求めることになり、その人たちから多くのことを学ぶことにつながっていった。教師ともども、いろいろな人の温かい心にふれ、生きる喜びをもらうことができた。

→ 4(4), (5), (7), (8)

4) 問題解決的な学習過程を考え、一人調べの時間と場を造る事を通して、主体的で個性的な追求ができた。かかわりの時間をとることで、互いの個性を認めあうことができた。

→ 4(6)

5) 本研究テーマは社会科の授業の工夫—生活を軸とし、教科を有効関連的に設定した多様な活動実践事例である。具体的な内容は、1時間の社会科の授業をどう展開し、社会科の内容を理解する過程の研究ではなく、教科の内容で学ぶ内容を、具体的な活動を通してより切実な内容を学習していくための、社会科授業の周辺を記載した。

授業をする単元を展開する中で社会科という教科を関連付けたため、社会科の授業の工夫という観点が薄くなってしまったことは反省する。今後記載方法の工夫をする。

2人学級のこどもの生き方の育成に力を入れ、自分たちで作った小麦を粉にする活動は、実際に体験することを通して、当時の人々の社会生活に触れる糸口となった。

砂糖きび教材は、「入嵩西さんのようになりたい」という高まりを見せた。

入嵩西さんは、生産だけでなく販売にもかかわっている。砂糖を作る工場の人として、沖縄地方の産業である農業の育成者として、収穫の多いさといきびの苗づくりの研究をしている。従って生産者や販売者として人間性に感動したためであろう。これまでのような、教科中心の学習では得られない人の生き方に迫ることができ、さらに自らの生き方を育むことができた。

過去に行った、社会科学習は、生産や販売の仕事や農家、工場、スーパーマーケットを別々に学習してきた。しかし、入嵩西さんによって、過去の学習が再構成され、総合的には、たく

さんの人々の生き方に迫ることができた。

今回の事例のように、生活を中心とした問題解決は、教科の狙いの明確さが欠け、はい回る人が多いとされてきた。しかし、今回の事例は、はい回ることでより深い教科の目標を達成できた。

7) 本単元では、2人の願いや求めるものを教材としたことで、多くの成果があったと考える。しかし、子どもが求めるからといってすべて教材としてしまうことは難しい。子ども自身、追求していく値打ちがあるものと思わなければ追求のエネルギーは生まれまいだろうし、教師自身の単元の見通しも必要になってくる。子どもが何を対象としたとき、エネルギーな追求と学ぶ喜びが生まれるのか、今後も研究を深めていきたい。

1) 引用文献

文部科学省：「小学校指導要領・総則」^{1), 2), 3)}

(2008)

社会科初志をつらぬく会：「生き方が育つ教育へ」黎明書房⁴⁾(2008)

2) 参考文献

文部省：「小学校指導要領」(1999)

文部省：「小学校指導要領・総則」(1999)

文部省：「小学校指導要領・社会科」(1999)

文部省：「小学校指導要領・生活科」(1999)

文部省：「小学校指導要領・総合的な学習の時間」(1999)

文部科学省：「小学校指導要領」(2008)

文部科学省：「小学校指導要領・総則」(2008)

文部科学省：「小学校指導要領・社会科」(2008)

文部科学省：「小学校指導要領・生活科」(2008)

文部科学省：「小学校指導要領・総合的な学習の時間」(2008)

文部科学省：「小学校指導要領・理科」(2008)

大雨河小学校・岐阜大学石川英志(共著)：「ふるさと総合学習」農文協(2002)

津守 真：「保育者の地平」ミネルバ書房(2002)

倉橋 惣三：「幼稚園真諦」フレーベル館(2005)

単元の構想 「ふくらまそう ぼくとわたしの手作りケーキ」

※昨年度の実践の上に、今年度は何をやりた
いか考えてほしい。

※ケーキ作りについて
は、啓介の母親に先生に
なってもらい、教えてもら
う機会を設定したい。

※吉見さんや鴨下さ
ん、沖繩の翁長さん、
石垣市農業開発組合
へのお願いは、電話
を使って子どもたちが
する。

※小麦は時期的な
ものもあり、種から
栽培することは難し
いものと思われる。
そこで万里の思い
をいかし、小麦から
小麦粉にする過程
を体験してほしい。
啓介は育ててみた
いと考えているの
で、そでたられるよ
うに支援していき
たい。

※小麦粉作りを1
学期。いちごの栽
培を2学期。さとう
きは1学期から2
学期にかけて学
習していく見通し
で、意識が連続し
ていくよう朝の会
なども有利に利用
していきたい。

